『妙壽さんの一生』

ひじり在宅クリニック　院長　岡本 拓也

私が思い出す記憶の中の妙壽さんの姿。はにかんだような優しい笑みを浮かべて車いすに座っている妙壽さん。もう一つは、命の灯が燃え尽きようとする中でも、小さな痩せこけた手を合掌して微笑みを浮かべ軽く頭を下げて下さった妙壽さん。

施設への訪問診療で初めて妙壽さんとお会いしたのは、2017年8月3日。その時に、妙壽さんが言われた言葉は、「みなさんに迷惑をかけたくないので、早く逝きたいです」。もっとも、悲壮感を漂わせながら暗い表情で言われたのではなく、穏やかな表情で微笑みを浮かべて軽やかにそう言われたのでした。

妙壽さんはいつもセンスのいい服を着ておられたので、いつの頃からか、妙壽さんの衣装チェックをする…というか、妙壽さんの衣装を話題にするのが毎回の診察の際のお決まりになっていました。聞けば、娘が選んで持ってきてくれるとのことでした。妙壽さん自身も、「職業柄おしゃれはしなかったけど、今はおしゃれができるようになって、とても楽しい。遅ればせながらの青春のようです」、と少女のような初々しい笑顔で話されていました。

妙壽さんは仏教の僧侶で、日課としてお経を唱えておられました。「霊が来ることがあるけど、そういう時は経を唱えるんです」と秘密を教えてくれるように話されることもありました。妙壽さんが僧侶だということは知っていましたが、どのような経緯で僧侶になられたかを妙壽さんに尋ねてもすっきりとわかる説明はなく、妙壽さんが仏門に入られた経緯は、妙壽さんが亡くなられた後に三女さんから教えていただくまで詳しくは知りませんでした。

妙壽さんは元々細身の方でしたが、だんだんと食が細くなり、老衰の過程を辿って行かれました。時に誤嚥性肺炎や貧血の治療、褥瘡のケアを必要としながら、ベッドに横になる時間が増えて行きました。亡くなる1年ほど前の診察の際に、車いすを押されて診察室に入って来られた妙壽さんに向かって、「いま、何かお辛いことはございますか？」と問うたところ、ほんの一瞬真顔で考えられた後、ニコッと微笑まれ、「生きること、だね」と、茶目っ気たっぷりに言われました。そんな妙壽さんが愛おしく思えました。

妙壽さんは、身体の栄養をすべて使い尽くして、強い風が吹けば飛ばされてしまいそうなほどの身軽なお姿になって、2022年7月21日9時27分、旅立たれました。享年97歳と7ヶ月でした。

ここから後は、妙壽さんの死後に三女さんから伺った話です。妙壽さんは11人兄弟姉妹の末っ子で、一番上の姉とは21歳離れていました。一番上の姉は樺太に住んでいましたが、姉を頼って樺太に渡った妙壽さんは、その姉から紹介された男性（姉の夫の甥）と結婚。間もなく長男が生まれましたが、1歳半で亡くなったそうです。夫婦はたいへん落ち込むと同時に、そのことで妙壽さんは夫に責められているようにも感じていたようです。夫婦ともに仏道に縋るきっかけとなる出来事でもありました。その後授かった3人の娘たちは無事に育ちましたが、妙壽さんは不慮の死を遂げた長男の死を97年の生涯を閉じるその日までずっと背負って来られました。妙壽さんの夫は55歳で会社を退職された後に出家・得度され、妙壽さんは67歳で出家・得度されました。「妙壽」という名前は、その時に戸籍上も改名してつけられたお名前だということを、私はその時に初めて知りました。

三女さんの夫は中学生の頃に父親を亡くし、立て続けに母親も亡くされたそうですが、夫の後を追うかのように亡くなった三女さんの夫の母親と自分を対比させて、「夫が死んでから四半世紀も生きた」自分自身を、「私たちは仲の良い愛し合ってる夫婦ではなかったからだろうね」と、ことあるごとに自嘲気味に話していましたが、そんな発言にも妙壽さんらしいユーモアを感じるのでした。妙壽さんは三女さんの夫をたいへん信頼していたようですが、三女さんが妙壽さんに結婚の話をした時も、「そういう境遇だからこそ良いんだ」と三女さん夫婦の結婚をたいへん祝福してくれたとのことです。

後日、三女さんからいただいた手紙の言葉。「いくつになっても母の死は悲しく寂しいものですが、母らしい笑顔を絶やさずにいてくれたことが、娘として嬉しく誇らしくもあります。今は、母親が亡くなったという以上に、百年の歴史を背負った一人の女性の人生の幕が下りた、そんな風に感じています。」